

1-2-12ex国家

「国家」の延長戦として、「民族」についてお話をします。

⑤民族

i) エスニシティ

「民族」というのは、〈言語や文化を共有する社会集団〉です。

それを、「**エスニシティ** (ethnicity)」とか「エスニック集団 (ethnic group)」と呼びます。

言語や文化の本質は**雑種性**です。

ということは、言語や文化を共有する民族も、本来、雑種です。

人々はお互にかかわりあい混じりあい、常に変化しながら、暮らしています。

そのなかで、言葉や暮らし方が自然に共有されるようになる。

そもそも民族は、そうした緩やかな生活集団にすぎません。

たとえば「ゲルマン民族」。

世界史に出てきますよね。

彼らは、歴史上、大小の国々を作りましたが、それは、ゲルマン民族と呼ばれた一派が支配者として国家をなしたという意味にすぎません。

そこには、さまざまな言語や文化をもったさまざまな民族が暮らしていました。

が、他の民族に求められたのは、ゲルマン人の支配に従うことであって、同化することではありませんでした。

一方、ゲルマン民族と呼ばれた人たちもまた、そう総称されただけで、「俺はゲルマン民族の一員だ」と自覚していたとはかぎりません。

ii) ネーション

近代になると、民族は、一つの言語、一つの文化を共有するものだと考えられるようになりました。

それが「**ネーション** (nation)」です。

近代国家が、さまざまなエスニシティを「国民 (nation)」として同化していくなかで、ネーションは誕生します。

その意味で、ネーションは、近代国家形成の過程で政治的、人為的に生み出された、特殊なエスニシティといえます。

言語や文化が本来もつ雑種性を考えれば、「一つの言語、一つの文化を共有する、一つの民族」など、もとより幻想にすぎません。

「国民」＝「民族」とは、いわばそうした幻想を共有する人たちです。

その幻想は、幻想だからこそ、より人々の心に働き掛け、精神的なつながりを強固なものにします。

「俺たちは同じ仲間なんだ」という同胞意識、「俺はこの国の一員なんだ」という強い帰属意識をもつようになりました。

国民国家が「想像の共同体」といわれるのは、そういう所以です。

そして、その幻想は、幻想だからこそ、現実の雑種性を無視して、「一つの民族」という純粋な存在を作り出しさえします。

第二次世界大戦で、ナチスドイツは、ゲルマン民族の優位性を説いて、人種的純化を図りました。

ホロコーストの大義名分となったのは、ネーションとなった「ゲルマン民族」です。

世界中で繰り返されるヘイトスピーチもまた、そうした幻想に取り憑かれた人たちのなせる業でしょう。

そういえば、《切り離し》は近代の特徴でした。

他から切り離された一つの民族——ネーションが近代的な概念だということがよくわかるはずです。

iii) 民族としてのデフォルト

このように、ネーションは、近代における特殊で特異なエスニシティにすぎないのですが、近代に生きる私たちにとって、ネーションこそが普通の「民族」だからです。

アイヌ人やユダヤ人が、以前から、独自の生活様式をもった民族であったことはたしかでしょう。

が、彼らは、日本やヨーロッパの近代国家形成の過程で、「国民」から排除されることで、逆に、「自分たちは一つの民族だ」という意識を明確にもつようになりました。

アジアやアフリカでは、植民地から独立し近代国家を形成する過程で、「民族」が誕生していきます。

たとえば、ベルギーの植民地であったルワンダ。

もともと共存していたツチ族とフツ族が分割統治政策によって対立し、互いを違う民族だと意識するようになりました。

その結果が、100万人にも及ぶといわれる虐殺。

1994年のことです。

たとえばみれば、武士と百姓がそれぞれ民族化し、多数派の百姓が少数派の武士を一方的に殺したという事態です。

アメリカは多民族国家である、といわれますよね。

が、アメリカは国民国家ですから、ネーションとしては、「アメリカ人」という単一の国民＝民族から成り立っています。

一方、その国民は、イタリア系、ロシア系、ユダヤ系など、さまざまな風習や伝統をもった人たちから成り立っています。

つまり、多様なのは、エスニシティとしての民族なのです。

とっているエスニシティが、イタリア、ロシア、ユダヤと、すでに国家単位、ネーション単位で語られていることに気づきますか。

私たちが「民族」を語るとき、ネーションから逃れることはむずかしいのです。

iv) 民族という呪い

民族が大きな問題として浮上してくるのは、1990年代以降です。

世界を二分していた米ソの冷戦が終結して、それまで抑え込まれていた民族間のいざこざが表立ってきたのです。

これまで見てきたように、近代の国家形成が「民族」を生み出していきました。

そして今度は、自分たちを「一つの民族」だと思うようになった人たちが、「民族自決」を盾に、新たな国家を作ろうとする――それが民族紛争を引き起こしています。

たとえば、A国の少数民族であるB民族が独立してB国を作ったとします。

しかし、B国の中には少なからずA民族も住んでいるはずです。

B国内のA民族は、B国を分割して、A国に併合されることを望むかもしれません。

また、B国内には、さらなる少数民族のC民族も住んでいるかもしれない。

B国は、かつての自分たちと同じ境遇に置かれているC民族の独立を認めるのでしょうか。

人々が暮らしていくために、言語や文化を共有した社会や仲間が必要です。

それは本来、生きていくために自然に生まれた、緩やかな集団にすぎません。

そうしたエスニシティがネーションへと変質していくのが、近代です。

近代国家が「国民」として人々を同化しようとした結果、ネーションという「一つの民族」が生まれます。

民族の雑種性を考えると、この「一つの民族」というのはただの幻想にすぎません。

が、幻想であるがゆえに、私たちの心を支え、そして縛っていきます。

泥沼の民族紛争が起こるのも、ネット上にヘイトスピーチが飛び交うのも、この「一つの民族」という呪いに囚われているからでしょう。

私たちのアイデンティティにとって、「日本人である」ことは大切です。

でも、その日本人には、さまざまな考え方をもつ、さまざまな人たちがいるのを、私たちは知っています。

「日本人」もまた雑種なのです。

それに気づくとき、ナショナリズムとは、自分や家族、仲間たちが暮らす日本を愛し大事にすることであっても、自分の「正しい」と考える日本人のあり方を押し付けることではないとわかるはずです。

「日本人」が雑種なら、他の民族も雑種です。

そう気づくことができたなら、「一つの民族」同士が争うようなことはなくなるのかもしれない。